

2021年度県文連「芸術たのしみ広場」(鳥取県委託事業)

写真シンポジウム「写真をアートに」報告

去る9月5日、倉吉市文化活動センターに於いて、鳥取県の委託事業である2021年度県文連「芸術たのしみ広場」写真シンポジウム「写真をアートに」を開催しました。

ことしの「芸術たのしみ広場」は、昨年よりも更に厳しいコロナ感染症の拡大に晒され、昨年以上の予防対策を強いられました。そして、より広い会場をと、同センター3階の大会議室に設定し、ソーシャルディスタンスを十分に確保しました。

13時30分より、恒例のミニコンサートを開催し、現代の日本歌曲をソプラノ独唱で楽しんでいただきました。鳥取オペラ協会を代表する「尾前加寿子さん」の歌唱は、とても高いレベルであり、聴衆を魅了しました。美しい音楽を聴いた後では、どんな話を聞いても色あせるものであり、シンポジウムの展開が心配になるほどでした。

その後、主催者を代表し、県文連常任理事で倉文協副会長の「尾坂俊恵氏」が開会のあいさつをし、2013年よりシンポジウムを継続している事、初回より連続して参加して頂いている「福島多暉夫氏」への謝辞が述べられました。そして、シンポジウムのコーディネーターである計羽孝之氏にバトンが渡され、会が進行しました。

【1】基調提案

「写真をアートに」

まず初めに、今回のシンポジウムが7回目となる事が説明されました。(2013=写真の現在、2016=写真の未来、2017=写真は何をするか、2018=写真による抽象表現の楽しみ、2019=写真表現の楽しみ、2020=写真表現と芸術活動) これまでは、現代アートとしての写真の在り方について、かなり専門的な深みを模索してきましたが、今回は県からの要請もあり、初心者向けのテーマ設定が求められました。そこで「写真をアートに」と設定し、単なる写真をアート作品にするための方策を話し合う事に致しました。(当日の基調提案に後日加筆して記載します)

今時のインスタ映え写真全盛の状況から、アートを求めるには、かなりの意識改革が必要であり、まず初めに写真の概念を覆す必要を話しました。



「月面再訪1、2」を見ていただきました。これは、月面でバーベキューを楽しむ写真と月面にコロナ細菌を捨てている写真です。現実として在りえない写真です。これまでの「真実を写す」写真の概念から大きく外れています。それも、作者が撮った写真ではなく、宇宙飛行士の月面上でのショットです。他人の撮った写真を合成して自分の作品としているのです。これは、現代でも尊重されて来ている写真の概念を全く無視した、在りえない表現だと思われるはずです。しかし、現代写真のアート作品として高く評価されているのは何故かの問題は、これまでのシンポジウムで明らかにしてきました。美術の世界では、100年も前からやっている手法です。

写真の概念を覆す

その表現の可能性を拡大させたのは、まぎれもなくアナログ(銀塩写真)からデジタルへの技術的革

新があったからです。

現代ほど写真があふれている時代はありません。市井に暮らすマチュア写真家にとって、デジタルカメラの出現は、アナログからの革命に留まらず、これまでの写真の概念をひっくり返してしまったのです。銀塩時代のカラー写真は、その処理の一部は必ず専門業者の手を通すことが一般的でした。そして、写真全ての処理を一人で行なえるのがプロの技であったのです。単にきれいな写真を撮るのが目的であれば、今こそ人類総写真家といえるのです。なぜなら、最先端のカメラ機能を搭載したスマートフォンの普及率が先進国では80%以上であり、固定電話が普及していない開発途上国では、いきなりスマートフォンが爆発的に浸透しているからです。それも、画素数で言えば銀塩を越えたと言われたスチールカメラを凌駕する1000万画素以上のカメラ機能が搭載され、カメラ内加工のソフトが充足されているのです。スマートフォンの登場で、小型カメラはすっかり姿を消し、デジタル機能満載のスマートフォンはインターネット環境と合体して、インスタグラムの世界が構築され、撮った写真を簡単に全世界に向かって発信できるようになったのです。まさに誰でも写真家の様相を呈しているのです。

しかし、写真を撮ること自体は容易くなったが、写真を人生の伴侶にしたいと思っている方々にとっては、アートするスキルとセンスの獲得は必須です。そして「アートする視点」を見つけられずにいる方は多いようです。大多数は、写真を撮るが「アートを見失ったまま」であると言われるのです。

スマートカメラの利便性

スマートカメラは社会生活を送るための便利なツールであり、メモ代わりの記録媒体として有用であり、アートである必要はないといわれます。写真機能を使いこなして楽しめればそれでよいと思われる方々が大半な筈です。そして、社会に浸透している写真の意義は、写真の持つ機能を生活のコンビニエンスを豊かにするためのツールとしか認識されていないのが現実ではないでしょうか。

今回のシンポジウムのテーマは、デジタルカメラの進化で、誰が撮っても美しい画像が自動で撮れてしまう中で、個々の想いを反映させた画像を作り出し、観る者に感動を与えるアート体験をし、そして作品創りを可能としたいとのアーティスティックな願いを持つ人々に応えるものです。

誰だって写真でアートしたい

写真は既に多くの人々に慣れ親しみ、写真は誰だってきれいに撮れる時代です。しかし、なかなか美しい写真は撮れません。なれてくると、徐々に美しい写真は撮れるようになりますが、他人が容易く感動してくれません。絵画のように絵を描くという必須のスキルがいない代わりに、芸術行動としての「視点」が必要不可欠になります。

誰が撮った写真でも、作品にする為には、チョットした作画ポイントを知っていれば、なんでもない写真が命を得て、意味のあるアートに変わります。チョットした視点だけでは、チョットした「アート風」になる手軽さが、インスタ映えを狙う若者、趣味を探す定年退職組の、それまでアートな生活に縁のなかった方々までもが写真にのめり込めるのです。そして、「アートなんて！」と芸術という人生を軽んじる態度を取らせているのが現実かも知れません。そんな方々の大方の思考はカント風と言えば「自然美は芸術美を凌駕」するものであるとし、人間が手を加えて作り出す芸術美は不自然な美であるとする習性があるのです。あるがままの生活を、きれいに記録できれば、それでよい、むしろそれが良いとの認識が一般的かも知れません。それで満足される方はそれも「よし」だと思います。

アートとネイチャー

写真をアートとして高める活動をする人たちは、未だ一般人には理解されていない現実があります。また、手探りでアートを求め、現在進行形で学びながら写真を撮っている方も多はずです。油絵作家ならば、油絵具を使いこなす伝統的な技法と技術の習得無しに、作品を創り出すことは通常出来ないと考えられています(勿論例外はありますが)。しかし写真は、そのスキル部分に匹敵する技術の習得は不要になっていると考えられます。カメラ機能の進化は、搭載されているコンピュータが美しい画像をつくるための総ての演算を行っているのです。カメラ任せのオートで撮り、機械が作った平均的に美しい画像をアートだと勘違いしているだけかも知れません。しかし、本当は、カメラ機能を使

いこなすには、最新の知識と豊かな経験が必要であるのです。それにもかかわらず、カメラ機能を使いこなしていると勘違いする「ていたらく」がはびこっているのでは、と思います。シャッターを押したら出来てしまった画像(サイコロをふったら出てきた目)に満足し、作家としての人間の介在がないことに気が付かず、そのマンネリに陥ってしまうのかも知れません。

ところで、今時、時代遅れだと思われているヘーゲル風の「芸術美こそが自然美に勝る美」だと主張する方々が、写真作品を創ろうとする愛好家の大半であるのも現実でしょう。そして、デカルトの「我を思いて我あり」を曲解して利己主義的な美意識を唯一だとする「こだわり」として強弁するのです。そして、自分にとって都合のいい美意識を己の意思だと主張する人々の多さには、辟易とするのです。「我を思いて」というのですが「思うと言う思索」が出来るレディネスの有無を疑わないし、問い正そうともしないのも現実です。

アートの反対語はネイチャーであるとする考え方は、いにしえからあります。アートとは、人間の精神に則っているものであり、その理性から生み出すものだとこの考え方が、大勢を占めてきています。だから、誰でもアートしたいと思うのです。自然に手を加えて自然を越える美を生み出すのがアートなのです。自然の美しさより、己の中にある美の方が上だと確信するものだけが、自然に手を加えることが可能だとも言われます。そこまで言ってしまうと身も蓋もありませんが…。

さて、凄い写真、インスタ映えする写真は撮れても、それは所詮「写真」でしかなく、「アート」ではないといわれます。特に写真をアートとして撮っていると自認する方々は、他人の批評を嫌う傾向があります。そして、肯定的な論評しか受け入れることが出来ず、他からのサゼッションを受け入れるチャンスを失い、有効である刺激も失うことになるのです。「自分を信じる」という人にありがちなことは、自分の感性もリテラシーも認識できないのに「自分の感性」などという独りよがりの思い込みを、金科玉条としている愚かさが無くならないのが残念です。自分の写真を公衆の面前に提示し、自己主張するくせに、他人の批評を聞こうとしないのはルール違反です。客観的なものの見方を常に学び取ろうとする態度こそが、単なる写真をアートに変える原動力になるのだが…。

感動するとは



この写真は、有無も言わず、見る者の心を動かしてしまいます。水俣水銀中毒で奇形児として生まれてきた我が子を風呂に入れている姿は、無為の心では見つめられない衝撃を与えます。これは、ユージン・スミスが撮り、世界中に公害の残忍さ残酷さを見せつけて衝撃を与え、公害問題の社会変革の行動を促した作品です。ナチスによる無差別攻撃を告発したピカソの「ゲルニカ」に匹敵する作品です。

人は何に感動するのでしょうか？この写真は美しいのでしょうか。図版的には見事な三角構図をとり、美を作り出していますが、そんなことで感動に誘われるものではありません。そこには、苦難を乗り越えようとする親子の美しい幸福感があふれているからだす。

きれいな写真、絶景を写した写真、今まで見たこともない写真、そして驚きがあり、更に自然に対する^{おそ}懼れを感じさせる写真など、様々でしょう。もし、それらの写真に心が動かされるとしたら、それは単なる美しさや個性を越えたところにある「アート」の力を甘受しているからなのです。

今回のシンポジウムは、感動的な事象は無く、何の変哲もないただ美しいだけの写真が、アートに

変わる瞬間を、パネラーの皆さんに語っていただき、写真でアートする喜びや楽しさを知っていただくとの趣旨です。

写真を始めたばかりの方から、写真でアートしたいと思いはじめておられる方々にとって、すぐに真似る(まなぶ)ことができ、偶然ではなく安定してレベルの高いアート写真が撮れるノウハウとスキルが学べるシンポジウムになればと願っています。

美しさをつくる

何も考えずにシャッターを切っても、現代ではきれいな写真が撮れます。しかし、その前に、ちょっと考えて(アートシンキング)から撮れば、写真がアートに変わります。そこで、何をどう考えるかについて、議論の前段として必要な基本的な事をお話しします。

〔1〕素晴らしい写真とはどんなものか

写真家が、誰に何を見せたいのか、それは色なのか、シルエットなのか、そのインパクトを決めなければなりません。そのためには何を撮ろうとするのかを明確にしなければなりません。それに沿って、光の具合を考え、自分の目指すゴールに向かって構図を考え、様々なレタッチを施したものがアートな写真になるのです。

〔2〕構図が総てを決める

写真の初心者には、撮影の行動範囲が狭く、水平垂直の意識が薄いものです。そこで基本的な構図を覚えて下さい。

静型

○二分割構図 ○三分割構図(バランスが取りやすい) ○日の丸構図(テーマがわかりやすくなる)
○三角構図(安定感が取りやすい) ○サンドイッチ構図 ○シンメトリー構図(左右対称で安定しやすい)

動型

○斜線構図(思い切って斜めにすることで、インパクトのある写真が撮れる) ○放射線構図(奥行き感が得られやすい)

○アルファベット構図(S字構図・C字構図ともに、視線誘導が可能) ○パターン構図(インパクトのある写真になる)

○額縁構図(窓を通して写す、知っておくと便利) ○トンネル構図(奥行き感、立体感、視線誘導しやすい)

○ラヴァットメント構図(かなり難しい高度な構図法/エドウィン・ウェストホーフ考案)

奥行表現の手法

3景遠近法(近・中・遠) 三層構造の手法。前景に何を置くかが問われる。

☆色彩遠近法 衣裳・前後の色彩 ☆空気遠近法 空気の抜け・霧等 ☆線遠近法(透視図法) 消失点の設定

※これら複数の構図が、微妙にまじりあい効果的になる場合が多い。例えば放射線構図と三角構図など。写真撮影の前に、どう撮ろうとするかを考えて構図を決めてから撮影する方法もある。まず、撮りたいものを撮っておいてから、その写真のバランスが悪い時にはレタッチ時に構図・色彩バランスを直すこともできる。

〔3〕四つの光を考える

○順光(色彩が素直に写る。しかし、立体感が失われる)

○サイド光(順光より立体感が出る。光側と影側の差が生まれる)

○逆光(写真がドラマティックに撮れる。シルエットになって暗くなる)

○半逆光(モノ撮りに向いている。被写体の色が見える。逆光のように立体感が撮れる)

〔4〕その他の事

○撮影する被写体との距離をどうするか。

○撮影する被写体のアングルをどう決めるか

○撮影する被写体のポジションをどこに置くか

○そして、最後に光をどう見るかを決定する

※横位置撮影を基本としたい。将来的にはRAW撮影し、色彩補正することが望ましい。

それらを撮影者が考え抜いて写真を撮ることで、作品の方向性が決まるのです。そんな訳で、写真を撮る上で、基本的な事をまず学ぶ必要があります。

以上が基調提案でした。

【 2 】 講師の意見

続いて、シンポジストの

オピニオン・プレゼンテーションがありました。

安養寺亨氏

安養寺氏は昨年引き続きの登場です。安養寺氏は、「私がモノクロ写真を撮る理由」をテーマに話して頂きました。その理由は、まず、モノクロは自分にとって表現しやすいとの事です。色のあふれている時代にあってモノクロに取り組んでいるとの事です。そして、自然を撮りながらアートを目指しているとのこと。作品作りにおいては3つの方法がある。

- ① モノクロフィルムで作画
- ② デジタルカメラのモノクロモードで作画
- ③ カラーで撮って、フォトショップでモノクロに作画

その中で、現在はカラーで撮ってソフトでモノクロにしているとの事でした。

作画例 彼岸花

昭和時代(モノラル)の懐かしさを求めないで、あえてモノクロの美学を追及する。最初からモノクロにする事を考えながら、その特性を考慮して撮るのです。



赤い花びらをより黒く表現したもの。花びらをより白く表現した。つまり、モノクロの面白さは、白と黒。主題を単純化する面白さ。

作画例 サンドアート



砂丘を撮ったものと勘違いされるが、港に船で運ばれてきた砂の置き場を撮ったもの。日々風化して砂の山に表情が出来たものを撮っている。作画はモノクロであるが、全てカラー・データをモノクロプリントしている。カラー画像をあえてモノクロにすることで、写っていても見えないものが生じ、単純化されてテーマがより明確になるという訳です。

小矢野貢氏

小矢野氏は、「写真がアートに変わる時」と題して話して頂きました。小矢野氏は、若いころからビデオ撮影を中心にされており、定年後写真に軸足を移されたとの事です。撮影するジャンルは諸々ですが、最近はストロボを使ったポートレートに特化しているとのこと。自然光のみの写真に、ストロボという人工光源を加味することで、新しい可能性が出てくる例として、夕日の中でストロボを使って撮影したもの。



海の中で、モデルの後ろからストロボを光らせる技法。



スローシャッターでモデルを動かし、ストロボで止め

る。



長時間露光の中でモデルを動かしストロボを連続点灯させたもの。(この写真の面白さは、写真でしか表現できない画像を作り出していること。この作品はサブジェクトに固執しないで、オブジェクトになっている点を評価している。つまり、言葉やコンセプトをこえたところで画像の持つ物質性を表現

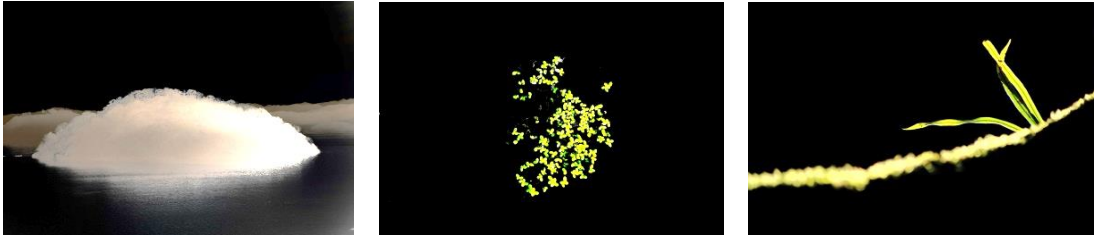
している。※)

モデル撮影のポイントは、視線を外すことでアート作品になりやすい。そして、モデルに対して「かわいい」「きれい」と感じ、撮影するもの自身が感動体験しなければアートにはならないのかも…。

時本亮氏

時本氏には、美を発見する喜びについて話して頂きました。時本氏は、常に自然の中に美を発見する喜びを求めて写真を取り、定着させているとの事です。それは、自然に対する畏敬の想いが、人間を自然と同化させることになり、美の中に入り込む生活を求めているとの事です。これは日本人の自然観、自然を、畏怖を感じて見ている事であり、アートのある生活をしているとの内容でした。

作画例



小山池の小島を白黒反転して画像を神格化してみたとのこと。雑草の中にさりげなく美が存在することを発見するとのこと。

福島多暉夫氏

福島氏には「誰でもアート」をテーマとし、総括的な考え方を話して頂きました。まず大切なことは、常にアートの眼を持つこと。カメラを持って外に出れば、偶然の出会いはいくらもあり、アートの眼が育つ。そうしていると、自然や生活の中にどうにも気になるものが生まれる。植田正治先生は道を歩いていて、いつも「おもしろいなあ!」と言っておられたが、それはアートの眼を持っておられたからだと思う。つまり、「鶴の目、鷹の目」で、物事を見るということです。モノを見る目を変えていく事が肝要なのです。

カメラがいくら進歩しても、カメラがシャッターを押すわけではない。面白いものを見つけたり感じたりする意志の力がシャッターを押すのです。

絵画では、自分の思うまま自由に描けるが、写真はそうはいかない。何でもかんでも全て写ってしまいます。そこで写真は、不必要なものは写さないと言う、マイナス思考が大切になります。現代のデジタルはレタッチでどうにでもなるが、銀塩時代は、暗室作業に限界があった。デジタルでは、パソコンを使って、銀塩ではできなかったことが、自由に画像処理できるようになった。そこで、アートな作品作りの可能性が拡大していったのです。

パソコンでの様々なソフト利用によって、写真は容易に合成でもカット手も出来るようになっていく。自己表現のためには、なんでもありだが、全てのベース写真、カット写真を自分で撮影することを信条としているとの事であった。

作画例 希望



この作品は、日野川河川敷の上に広がる青空を捉えたベース写真に、他で撮った人物と鳥をはめ込んで構成し、額縁部分をパソコンで作ったものである。これなど、今までの写真という概念で凝り固ま

った人には、「なんじゃこりゃ」となる。どう作品を創るかではなく、出来上がった作品で勝負しているのです。空想を作り出しているのではなく、現実を構成して作っている。現実の写真を使って、面白い写真を作るのだ。「ベスト・グッドフォトとはなんですか」と、植田正治先生に問うたことがあります。そのとき植田先生は、「現実をありのままにうまく写しだすこと」と言われました。うまく写しだすの「うまく」が重要なのです。つまり現代ではデジタル機能を十全に使いこなすことであり、現実を凌駕した作品を作れという訳です。どんなに加工しても、観る人にバレないことが必須です。種明かしを見せられればミラクルはなくなります。ということでした。

シンポジウムの内容

まず初めに、私たちの身の回りに、写真をアートとして扱っている環境があるのかの問題があります。私たちの日常生活の場(家庭とか事業所、公の施設)に、アート作品として写真が展示されているかどうかの問題。絵画作品では地元作家の作品が売買されるが、写真を買う風土が見られないのが、私たちの身の回りの現状です。

絵画であれば、個展のキャプションにさりげなく値段が表記されていたりしますが、写真展では見たことがありません。百貨店の美術画廊で、写真作品の売り買いを見たことがないのです。アートは売り買いされているが、写真はアートになっていないとの判断が画商にないのかも知れません。もともと写真作品が安すぎて、ビジネスにならないのかも知れませんが…。※

小矢野氏の場合

個展をすると売ってもらいたいとの声がかかり、売ったことがあります。しかし、写真に対する価値観が全体的に低く、安価でしか売れないのです。写真作品を売ってあげましょうかと(マネジメント)の声もかかるが、結局作品搬送は自分でしなくてはならず、手間暇がかかり過ぎであり、作家個人では対応しにくい。写真作品を販売促進するマネジメントする業者があればいいのだから、これからの時代必要な時期が来ると思う。

時本氏の場合

値段を付けて展示すると、それなりに売れるが、その大半は知人であり、お義理で買ってくれていただけであることが分かり、次回からは売らなくなった。そもそも、写真を買うと言う意識が全くないし、写真作品を売ると言うシステムも身近にない。全国区ではそのようなサイトは存在するが、一般的ではない。

写真アート※

そもそも、写真家にプロもアマもないと思います。作品の善し悪しだけが問題にされるようになれば良いのだが、良い作品かどうかの判断がつかない写真作家も多い中で、何をよりどころにすればよいか、いささか戸惑うのです。そもそも、生活の中にアートを楽しむと言うものの、アートを楽しむ生活を保持していない方々にとっては、写真アートだろうか、絵画作品だろうか持ち込む余地はないのでしょうか。では、現実の日常生活の中で、どれくらいの写真作品が浸透しているのかを考えても、写真作品の売買市場が存在しないのであれば、何もないと言っても過言ではないでしょう。時たま、改装された喫茶店の壁に、アート写真が飾られることはあっても、自宅には、自分がとったお気に入りの飾るのが関の山であろう。

写真をアートに変える

福島氏の場合

アートを楽しむ生活を保持するためには、日常生活にアート作品を意図的に配置することから始めなければなりません。皆さんのお宅には、アート作品と呼ばれる作品がどれくらいあり、常にどれくらい身の回りに置いていますかの問いかけがありました。

1点もない→これではお話になりませんね。

10点程度→これは、アート作品購入にがんばりましょうということです。

10~20点→よくやっています。

20~30点→大変良くやっているということで花丸だと思います。この段階がアートのある生活の基本

だと思えます。

つまり、自らがアートのある生活をする事が何よりも大切であるのです。そして、写真をアートに変える楽しさの基本は、写真を遊ぶ、カメラを遊ぶことだと思えます。そのためには、写真を遊ぶということの意味を充分考えて欲しいのです。いくらスマホでインスタ映えする写真を撮っても、スマホ画像の中の商品カタログの類であり、アートにはなりにくいのです。プリント作品は用紙に印刷され、光源の反射光で画像を見えています。しかし、スマホは、光源そのものを見ているのであり、自然界に存在しない光を見ているのです。

もう一つ、植田正治氏の言葉「現実をありのままにうまく写しだすこと」との言葉の中で、「うまく」は、現像処理を外注してはだめだということです。外注して作られた作品は、最早あなたの作品ではないのです。外注を受けた業者(又は手慣れた別の作家)か他の作家の作品になってしまうのです。写真教室では、レタッチ技法を学ぶために、手慣れた作家が見本を示すことがあります。それは学ぶために必要な事です。再度言いますが、作家がその作品のレタッチに介在しなければならないのは当然のことであり、良くも悪くもそれがその作家の作品となる必須条件なのです。

インスタ映え※

インスタ映えを狙うための現像ソフトは、インターネット上にあふれています。その機能の魅力的な誘惑は半端ないものがあります。加工ソフトと呼ばれるものの可能性は際限なく、その限界もすべてを否定するほど存在するものです。一番使われるのは、明暗の加工、色彩の加工ですが、インスタ映えを願う方々が、色彩に対する本能的な美意識とバランス調整のスキルがあるかどうかなのです。一般的にインスタグラムに登場してくる写真のほとんどは、色価(ヴァールール)が無視された、気持ち悪いものです。しかし、それらのアンバランスも文化として定着するのが現代の風潮であり、一時のけばけばしい化粧が流行ったように社会に理解されていく寛容があるのかも知りませんが…。そして、インスタ映えも社会性を持ってしまい、写真の一分野になってしまうのかもしれないのです。

しかし、幾ら写真の世界が可能性を拡大していったところで、その可能性を操る筈の写真作家が、アート・センスとそれを作り出す技能がなければ、アートと思いついでいたものの破綻する速度と、偽りの感性の崩壊は免れることは出来なくなるでしょう。

小矢野氏の場合

加工ソフトは使うが、不自然にならないよう細心の注意を払っている。そうしなければ、現実の被写体の疑似作品となってしまう。

安養寺氏の場合

いくら加工しようが、元の写真とのマッチングが問題であり、いかに自然に見せるかが問題とのこと。

福島氏の場合

編集(レタッチ)に於いて、現場を知っている人は、優れた作品を創りだす。それは、現場の実際通りを再現するということではなく、表現するイメージを捉えているということ。モノによっては大きさのバランスを崩すことによって、バランスよく見えることがある自分の作品様式を持ち、作品構成して行くべきです。

作画例



何れの作品も、ベース写真に、他の画像を合成し作成している。重要なのは、光源を一か所に固定できるかどうかで成否を分ける。

写真の機能を使いこなす※

現代のカメラ機能は、日進月歩、目まぐるしく進化している。AF機能は0.02秒まで進化し、連写20/秒は当たり前前の時代となっている。ズーム機能、目の追跡機能、そしてカメラ・アクセサリーの色々は際限がない。狙うものによって使いこなすのだ。最近使われなくなりつつある三脚、フィルター、フラッシュなどについては、再考する必要がある。

更に、編集ソフトはフォトショップを代表として、限りなく存在する。無料ソフトも多数あり、用途に合ったソフト探しが重要となる。そして、マニアにおいてはプリント用紙の選択に拘り、印画のディテールが写真の全てだと、仕上げの目途に添った紙選びが決めてとなったりしている。

フラッシュの件

小矢野氏の場合 夕景の中でフラッシュを使うと、様々な選択肢が広がります。

作画例



夕景でのフィルターとフラッシュの併用により、適切な色温度を調整し、狙った肌色をだします。夕暮れの自然光の中でフラッシュを使うことで、画像の世界が広がります。

数秒間のスロー・シャッターの中で、モデルに動いてもらいフラッシュを連続照射することで、時間表現と空間の広がりを作品に定着させます。

画像の画素数を増やす

安養寺氏

現像処理ソフト「フォトショップ 2021」の新機能として、撮影済みのデータ画素を強化することが出来るようになってきました。今年から入った機能です。ブリッジ(Low)を開き、プレビューの中にある「強化」を選択すると画素数が上がります。縦横が2倍になりますので、5000万画素のデータであれば2億万画素にスーパー強化されるという訳です。私は、スマホ撮影したものを、このソフトで画素数を強化して使っています。

プリント用紙の選択

安養寺氏

プリント用紙の選択は、写真画像作成の最後の砦です。どんな紙を選ぶかで作品は一変するものです。モノクロ作品で現在使っているものは、主に反光沢の紙であり、スムーズな画像処理が可能です。外国の紙(キャンソン)も使いますが、この紙はモノクロ表現に最適です。その他さまざまな紙で作品作りがなされていますが、因州和紙にプリントする試みも可能性があると思います。

まとめ※

インスタ映えから、アート映えを目指そうと言うシンポジウムでしたが、この両者は似て非なるものです。インスタ「映え」とは、スマホの液晶の中での「映え」であって、作品の展示用プリントとは全く異なった画像なのです。

写真作家が忘れがちな画面サイズの問題があります。絵の世界では、画面サイズによって表現内容が異なるのが当たり前ですが、写真の場合は、プリント機器の操作一つでどうにでもなると言う利便性と作品の破壊性を持っているのです。画面サイズには、そのサイズでなければ表現できない必然性

がなくはなりません。大画面の絵画では、画面構成のパーツをエスキースとして数十枚のアイデア・スケッチを描き、練り上げていきます。ですから、大画面の絵画を「大作」と呼ぶのです。写真にもサイズに合う画面があるはずですが、しかし、現実には、サイズに適していない作品が多々あるのが残念です。土門拳は常にプリントサイズを考慮して撮影していたのは知られた話ですが、公募展におけるサイズの固定は全くナンセンスです。手に持って鑑賞するのではなく、ギャラリーにおける展示は、もう少し大きい方が良いと思っています。画像の大きさは、力を持つものです。

アート映え

福島氏

インスタ映えとは、ディスプレイ上のことです。「アート映え」とは、アート作品に作家が介在していることが必須です。作家の介在とは、画像処理の考え方をアートにすることです。それは、見せ方(表現方法)、その中身が問題なのです。そのためには、絵画作品を含めた、あらゆるアート表現(絵画、彫刻、写真等々)の方法を学ぶことです。学ぶということは、表現の「ヒント」をもらうことなのです。創造するとはあらゆる芸術を学び、真似して行くところから始まります。そのためには、新しいアートを積極的に見る。本物と言われる優れたアート作品を限りなく見続けることに尽きます。

県展にジャンルがない

時本氏

鳥取市展の改革のため、山口県の県展担当者を招聘して話を聞く機会がありました。その折、山口県の県展には、ジャンルがなく、大きさの制限もなく、自由な発想で展示されているとの事でした。(今、鳥取県を含む全国の県展は、時代の潮流に遅れているのではないのでしょうか。国際展では、すでに平面作品と立体作品に区分されているが通り相場です。日本では権益を持ったジャンル分けの伝統は容易く変わらないのでしょうか。そんな中で、写真こそが未来に向けた可能性が担保され、これからのアートは、写真の時代かもしれません。(しかし、権益を持った県展等の審査員は、未熟さゆえの選択眼しかなく、群を抜いた作品を見逃しているのではないかと疑われたりしている。※)

時本氏

写真には「人」が出る。また、日本人の自然観は独自であり、独特なアートの可能性がある。

小矢野氏

自分が感動する作品でなければ、他の人は感動しない。撮るまえから、このようにしたいと言う意識がないとだめです。つまり、撮影プランを持つこと。シナリオを考える。ロケハンをする事、それが私の撮影仕様です。

安養寺氏

日常生活にアートを持つことが大切。自分の常設展示場(米子医大の一角)を持っています。「写真」は、真を写すと言うが、写真の英語表記「フォト」ではなくピクチャーの方が、写真作品には、似つかわしいのでは。(注:「picture」は、「写真」「絵」「画像」などの意があり、「photo」よりも幅広い意味を持ちます。また、「想像する」「思い描く」といった動詞の意味もありますので、アート写真にはぴったりです。)

福島氏

写真が日本に伝わって150年、これまでも写真をアートにする要素は多々あった。更にデジタル時代を迎えて、写真の世界は急速に変化しており、考え方を進化させなければなりません。コンテストでは、今でも加工について制限が加えられています。カメラ内では既に自動で加工がおこなわれている時代、現像ソフトを使って自由自在にレタッチされているにもかかわらず、加工に制限が加えるなんて時代遅れの感があります。自然界は天然色(カラー)であるのに、あえてモノクロにする事は不自然であるし、大きな加工が施されているとも考えられるのです。今の時代、合成加工は写真進歩の条件だと言えます。

締めくり※

今回のシンポジウムは、「写真をアートに」でしたが、アートにするための手段は何でも有りの時代です。様々なアイデアの中から、物語を紡ぎだし、自由に写真を楽しまれることをお勧めします。

写真アートの実験者「植田正治氏」は、モノクロ時代から画像合成や加工は日常であったし、インクジェットプリンターが一般化する前に、その可能性の探索を示されていたりします。アナログ時代の写真に凝り固まった頭は、さっさと捨て去りましょう。写真という前に、「アートなんだ」ということを頭の中にたたき込み、未来の「植田正治」が出てくることを願っています。

※印の文責／計羽孝之